

## Lesson 3

## Hatching the Egg of Hope

### ミヤザキケンスケ

#### ■経歴

ミヤザキケンスケさんは、壁画を主に手がける画家です。1978年、佐賀県佐賀市に生まれました。佐賀県立佐賀北高校芸術コースで絵を学び、筑波大学芸術専門学群、同大学院修士課程芸術研究科へ進学しました。その後渡英し、2年間、ロンドンでアーティストとして活動しました。



Super Happy をテーマに、観客が見た瞬間に幸せになれる作品をめざして創作活動を続けています。その一環として、世界中に壁画を残す活動チーム「Over the Wall」を主宰し、2015年から毎年世界各地の人々といっしょに壁画を制作しています。また、自身が描いた絵の個展を開いたり、商業施設などを訪ねてライブペインティングを披露したりするほか、学校でのワークショップなどにも携わり、多彩に活動しています。

#### ■高校時代

ミヤザキさんは15歳のとき、「一度きりの人生をドラマティックに生きよう」と決意しました。小さな町で、サラリーマンの父と専業主婦の母のもとに育ったミヤザキさんは、そのまま平凡なサラリーマンになってしまうのが嫌だと感じていました。ドラマティックに生きるには、自分が本当にやりたいことをやるのが一番だと思い、必死で考えた結果、思い浮かんだのが「絵」でした。小さいころから絵が好きで賞を取ったこともあったため、絵描きになろうと決心し、佐賀県内で唯一芸術コースがあった佐賀北高校へ進学しました。

しかし入学後は、予想と違う環境に失望しました。女子生徒が9割を占める環境で、男子生徒はたった6人でした。うまく環境になじめず、ひたすらデッサンが続く授業に退屈を感じていたミヤザキさんは、バンド活動に打ち込む生活を送りました。高2の春休みごろ、絵を描きたくて環境の整った芸術コースを選んだにもかかわらず、真剣に絵に向き合っていないことを反省する気持ちが芽生え、それか

らは本気で絵を学ぶようになりました。

大学進学を控えたミヤザキさんは、絵描きになることをさらに強く意識するようになりました。しかし、そのためになにをすべきかわからず、「芸術といえばパリ」という漠然としたイメージから、パリで勉強したいと考えました。ミヤザキさんは親に援助を頼みますが、却下されます。それでも粘り強く食い下がったところ、高校3年生になる前の春休み、ベルギーの親戚の家に、2週間行かせてもらえることとなりました。

ベルギー滞在中、街角でスケッチをしていると、道行く人が絵を見てリアクションしてくれました。ミヤザキさんはそれが嬉しく、またそれまで勉強のためと思ってやっていたスケッチが、言語の壁を越えてコミュニケーションできるツールであることに気づきました。この気づきは、ミヤザキさんが現在携わる壁画プロジェクトの原点となりました。ベルギーでの経験で自信がついたミヤザキさんは、その後筑波大学芸術専門学群へ進学しました。

#### ■大学・大学院生活

大学に入ったミヤザキさんは、再び壁に当たりました。ヌードデッサンや石膏デッサンなど、高校生 のときにもやった基礎的なことを毎日課せられました。自分より上手な人が大勢いることにも、うまく描けず先生に批判されることにもショックを受けました。加えて、有名な美大を出た人でさえ、画家として生計を立てられる人はごくわずかというのが現実です。高校・大学時代は、絵を描くことを楽しいと思ったことは一度もなかったとミヤザキさんは語っています。途中で投げ出してはなにも残らない、と自分を追い込みながら無理矢理続けていました。

#### ■ロンドンへ

大学院卒業後、ミヤザキさんはロンドンへ渡りました。本当はアメリカへ行きたかったのですが、美術系の学校に入る資金がなかったため、学生・就労者でない人でも滞在できるワーキングホリデー制度がある国を選びました。学生でも労働者でもないミヤザキさんは、銀行口座も作れず電話も持てず、家を借りることもできませんでした。さらに到着し

で一週間で全財産を盗まれてしまいました。家賃が払えないため、ゲストハウスの住み込み管理人になり、狭い管理人室で絵を描きながら過ごしました。インターネットで絵の注文を募り、わずかなお金を得る極貧生活でした。作品を公開できる場もなく、クラブやライブハウスをまわってライブペイントを披露したり、路上で絵を描いたりしていました。

当時のミヤザキさんは、社会への反発や怒りを感じさせるような攻撃的な画風の絵を描いていました。そのような絵こそがアートだと思ひ込みがあったといひます。しかし、路上で芸術活動をする若者たちと親しく



ロンドン時代の作品

なるにつれ、違和感を覚えるようになりました。彼らは社会に対して「マグマのような怒り」を抱いており、それを絵という形で表現せずにはいられないと感じていました。一方、ミヤザキさんは家庭にも周囲の人にも恵まれて生きてきました。ミヤザキさんは、自分自身の怒りは、単なるファッションにすぎなかったことに気づきました。

ミヤザキさんは疑問を抱きつつも、ダークな絵を描いていました。一方で生計のため請け負う絵は、結婚式で飾る絵や似顔絵などがメインで、依頼者の注文に沿った明るいものでした。ミヤザキさんの中で、闇のある絵が本当に描きたい絵で、明るい絵は仕事、と割り切った状態が続きました。

## 画家への道

### ■ケニアのスラム街での壁画プロジェクト

ロンドンでの滞在が終わりに近づいていた 2006 年、ミヤザキさんはテレビ番組で、ケニアにあるマゴソスクールのことを知りました。その小学校は、キベラスラムという東アフリカ最大のスラム街にあり、両親を亡くしたり、虐待されたりした、行き場のない子どもの居場所となっていました。

ミヤザキさんは、辛い境遇にある子どもたちを自身の絵で少しでも明るく元気にしたいと感じました。いろいろと調べたり、ケニア在住の日本人ライターに協力してもらったりして、マゴソスクールに

連絡を取り、壁画を描かせてもらうことになりました。

当時のミヤザキさんは、絵描きとして、自分の絵に他人の手を入れさせてはいけないと思っていました。また「自分の描きたいものを描くことがアートだ」という固定観念もありました。そこで、大きな口をあけたドラゴンの絵を毎日一人で描いていました。その 2 年前にフィリピンの孤児院で描いたドラゴンの壁画が子どもたちに大人気だったため、マゴソスクールでもきっと喜んでもらえるだろうと考えていました。しかし、見ている人たちはあまり喜んでくれず、それどころか空気が日々冷たくなっていきました。ケニアではドラゴンという架空の生き物は認知されず、子どもたちの目には、身近にいる危険な生き物であるアナコンダ（巨大なヘビ）のように映ったのです。先生からは、怖がって登校できなくなった子もいるので絵を消してほしいと言われてしまいました。



最初に描いたドラゴンの絵

ミヤザキさんは絵の描き直しに取り掛かりました。しかし、滞在期間が残り 1 週間になっていて、一人では描き終えることは不可能でした。やむを得ず、子どもたちにも描いてもらうことにしました。またテーマは、子どもたちが好きなライオンやバオバブ（熱帯アフリカに生える高木）にしました。

意外なことに、これが大成功につながりました。子どもたちはとても喜び、絵を描く前より明るくなったのです。ミヤザキさんの中で、それまでのアートに対する固定観念が崩れ去りました。人が見て喜ぶ絵を描くことの大切さに気づいたのです。また大勢で描くと、芸術としてのクオリティはやや下がるけれども、それ以上の一体感や完成の喜びが生まれることも知りました。

この感動や、このとき育まれた人間関係が、のちのミヤザキさんの壁画プロジェクトへつながっていきました。

## ■NHK『熱中時間～忙中“趣味”あり～』

ロンドンから日本に帰国したミヤザキさんは、すぐまたワーキングホリデーで別の国へ行ってみるつもりでした。その資金を得るため、ロンドンで貯めたわずかなお金で個展を開きました。ロンドンで自分がやってきたことに自信があったミヤザキさんは、個展を開けば必ず高い評価が得られると期待していました。しかし、期待に反して絵はまったく売れませんでした。資金をすべて使い果たし、後輩の家に住まわせてもらうような状態でした。

さすがにくじけたミヤザキさんは、佐賀の実家へ帰ろうと思いました。そのとき、まるでドラマのようなことが起こりました。「個展を見た」という人が電話を掛けてきて、仕事を依頼してくれたのです。その人はなんと NHK のディレクターで、テレビ番組『熱中時間～忙中“趣味”あり～』の背景画を描いてほしいという依頼でした。

2007 年 4 月～2010 年 3 月、NHK 総合テレビと BS NHK で、さまざまな趣味を紹介する番組『熱中時間～忙中“趣味”あり～』のセット制作をミヤザキさんは担当しました。約 10 メートル×2 メートルのパネルに絵を描く仕事でした。

その番組には、毎週ゲストが出演することになっており、ミヤザキさんは彼らの似顔絵も担当しました。しかし、当時のミヤザキさんの絵は、まだ暗いタッチのものでした。するとそれを見たゲストが、「自分はこんな顔なのか」と少し悲しそうにしています。心苦しく感じたミヤザキさんは、明るい色使いで笑顔を描こうと努めました。

そのうちに、ミヤザキさんの心境と画風が変化していきました。振り返れば、ミヤザキさんのそれまでの人生は、家族や周囲の人に恵まれた楽しいものでした。NHK から仕事が来たことで、画家としても経済的にも安定してきていました。ミヤザキさんは、闇を表現することで人の心を打つ、という方向性を改め、自分は楽しく生きてきたのだからハッピーな絵を描いたほうがよい、と思うようになりました。そして同じハッピーなら、70%や 80%ではなく、100%幸せな絵、「スーパーハッピー」を目指そうと決意します。仕事として描いてきた明るい絵と、ミヤザキさん自身が描きたいと思う絵が、近づいてひとつになった瞬間でした。

## ■東日本大震災

2011 年 3 月 11 日、東日本大震災が発生しました。

ミヤザキさんは、海外で壁画を描く計画を推進中でした。しかし、「日本が大変なときに、海外に行くのは違うだろう」という想いから、まずは仙台へボランティアに向かいました。そして市長に直接頼み込んで許可を取るなどして、子どもたちと壁画を描いたり、絵のワークショップを開いたりしはじめました。月に一回東北に通い、自分の絵がどう受け入れられていくか実際に確認できることは、遠いケニアでの活動とはまた違うやりがいがありました。

やがて、岩手県の大船渡市の海辺に仮設で建てられた理容店全体に、絵を描くプランが持ち込まれました。建物全体を塗るには、大量の画材が必要で、時間も費用もかかります。また、ミヤザキさんの中には、大きな悲しみが起こった土地で、建物全体を明るい色に塗ってよいのか、という重大な悩みもありました。自問自答の末、決意したミヤザキさんは、資金集めのイベント開催やグッズ販売などに駆け回り、多くの人の協力も得て資金を調達しました。そして絵の具を買いそろえ、自分の車で絵を描きに行きました。

この理容店のプロジェクトのあと、「絵を見てすごく元気になった」「復興の励みになった」と言われたり、感謝されたりしました。また震災から 5、6 年も経つと、通ってくるボランティアの数も少なくなります。雨風で劣化した絵の手直しに毎年やってくるミヤザキさんには、地元の人からも温かい目が向けられるようになりました。

## ■Over the Wall

2006 年のケニア訪問のあとも、ミヤザキさんは 2010 年、2015 年とケニアを訪れ、壁画プロジェクトを成功させました。3 回目のプロジェクトのあと、ミヤザキさんはこれまでにない手ごたえを感じていました。

それまでの活動は、ミヤザキさんの個人的な熱意による部分が大きいものでした。しかし 3 回目の活動では、集まったメンバーと一年間かけて試行錯誤して、コンセプトや目的、成功させるための方法論を固めて取り組むことができました。この経験を継続していくためにきちんとした組織を作りたいと考えたミヤザキさんは、「Over the Wall」というチームを結成しました。

メンバーは基本 10 名で、現地に行くのはミヤザキさんとカメラマン、ワークショップ担当者です。ワークショップは現地でおこなうもので、子どもた

ちが描いた絵で商品を作り、現地にお金が落ちるシステムとなっています。そのほかには、製品化するデザイナーやウェブ制作担当、資金集めイベントを手伝ってくれる人、翻訳者などで成り立っています。月1回ほどミーティングをおこない、年に1回、世界のどこかの国で壁画を描くというプロジェクトをおこなっています。

## Over the Wall プロジェクトの実績

### ■東ティモールの国立病院（2016年）

2015年5月、福岡県宗像市で国際環境会議が開催されました。ミヤザキさんは会場で、ライブイベントやワークショップをおこないました。すると東ティモールの元大統領や日本人の元大使に、「独立後間もない東ティモールでこのような活動をしてほしい」と頼まれました。

ミヤザキさんは東ティモールについて勉強したり、また現地 NGO と連絡を取り合ったりして準備を進め、2016年、現地へ入りました。そして首都ディリに滞在し、国立病院の壁に東ティモールの明るい未来を描きました。孤児院や小学校などでも、子どもたちを対象としたワークショップをおこないました。



東ティモールで描いた壁画

### ■ウクライナでの UNHCR との共同制作（2017年）

ウクライナは、ロシアと欧州のはざまに位置する国です。2014年、ウクライナ政府と親ロシア派勢力の間で深刻な紛争が発生しました。

2017年、ミヤザキさんは、日本とウクライナの外交関係樹立 25 周年にあたる行事に招かれました。そして、首都キエフに、日本・ウクライナ友好の壁画を描きました。この際、絵筆をともにとったのは、内戦が収まらない近隣国、シリアやアフガニスタンからの難民の子どもたちでした。またウクライナ騒

乱で国内避難民となった子どもたちも参加しました。

ウクライナ東部にあるマリウポリ市は、ウクライナ騒乱で被害を受けた都市でもあります。その騒乱の際に被害を受け、弾痕がいまだに残る School NO.68 に、平和のメッセージを込めた壁画を描く仕事もミヤザキさんは頼まれました。これはウクライナの UNHCR（The Office of the United Nations High Commissioner for Refugees：国連難民高等弁務官事務所）との共同制作でした。

数キロ先では戦闘がおこなわれている警戒地域にある School NO.68 に描く絵として、ミヤザキさんはウクライナ民話『手ぶくろ』をテーマにした絵を企画しました。これは、寒い冬の日、さまざまな動物たちが手袋の中にいっしょに入って暖をとる、というお話です。その光景にミヤザキさんは、多様な人々が共存できる世界への願いを込めました。

### ■エクアドルの女性刑務所（2018年）

南米のエクアドルと日本は、2018年、外交関係樹立 100 周年を迎えました。その祝賀事業として、ミヤザキさんに壁画制作のオファーが来ました。

エクアドルの首都キトにある女性刑務所には、当時約 60 名の受刑者が収監されていました。この施設には、受刑者の子どもを預かる施設があり、母親以外には身よりのない乳児・幼児約 40 名も、刑期中の母とともに生活していました。その子どもたちに少しでも明るく過ごしてもらうため、また母親たちの社会復帰を支援したいという想いでプロジェクトを実施しました。



エクアドルで描いた壁画

### ■ハイチの国境なき医師団病院（2019年）

2019年には、ハイチの首都ポルトープランスにある最大のスラム街のひとつ、シテ・ソレイユにて国境なき医師団と協力し、同団体の病院に壁画を描きました。医療現場である病院に明るい壁画を描



くことで患者の精神的ケアを図り、また患者自身が制作に参加することで能動的な意識を持ってもらいたいという願いをこめました。



ハイチの病院に描いた壁画

### ■現在のミヤザキさん

ミヤザキさんの現在の活動は、壁画、個展、ライブペイント、絵のワークショップ、オーダーメイドの5つから成り立っています。イベントを開いたり、学校で講演をしたりしています。それでも、絵描きとして一番重視しているのは壁画です。

ミヤザキさんの現在の画風は、原色を多用したエネルギーギッシュなものです。「スーパーハッピー」をめざすため、花は満開、顔は正面向きなどと、構図からしてポジティブなオーラがあふれる絵を心がけています。

ミヤザキさんは、アートを通じて経済を回すことも考えています。貧しい地区で子どもたちといっしょに絵を描くと、笑顔にはしてあげられますが、貧困そのものは変えられません。しかし、有名なアーティストを呼んで絵を描いたり音楽ライブをやったりしたら、お金が集まって現地の経済を回すことができ、人々をもっとハッピーにできます。ミヤザキさんはそういうアーティストになりたいと思っています。

### 覆面アーティスト・バンクシー

ミヤザキさんも出会った、ロンドンの路上でアート活動を繰り広げる人々。その中で現在、世界的な注目を集めているのがバンクシー (Banksy) です。

その正体は謎に包まれています。イギリス出身の男性であり、1990年代、イギリス南西部の港町ブリストルで活動を始めたとされています。

その作風は、可愛らしい絵の中に社会への批判や風刺がこもったものです。しかしその表現手段は過

激です。公共物へ落書きする、あるいは美術館に無断で展示するなど、法律をあえて破ったりトラブルを起こしたりする事例が多くあります。そのため「アート・テロリスト」とも呼ばれています。有名になり高値がつくようになった現在でも、このような手法を取るところに、バンクシーが抱えている社会への怒りや、不公正への悲しみが感じられます。

バンクシーの活動の場は、ブリストルからロンドン、さらに世界へ広がっています。パレスチナ紛争が続くイスラエルでは、イスラエルがヨルダン川西岸地区に建設する分離壁に対する抗議を込めた「The Walled Off Hotel (世界一眺めの悪いホテル)」という名のホテルを開業するなど、画家という枠を越えた活動を展開しています。暴力に訴えなくても、芸術を通じて世界に声を届けられるという想いが込められている、とホテルの支配人は語っています。2019年には東京でも、ネズミを描いた落書きが出現し、バンクシーの作品ではないかと話題を集めました。

### 参考文献・ウェブサイト

ミヤザキケンスケさん公式サイト

<https://www.miyazakingdom.com/>

ミヤザキケンスケさん公式ブログ

<https://ameblo.jp/miyazakingdom/>

花咲かじいさんのような絵描きを目指して〔前編〕(株式会社オカムラ)

<https://www.okamura.co.jp/magazine/wave/archive/1602miyazakiA.html>

花咲かじいさんのような絵描きを目指して〔後編〕(株式会社オカムラ)

<https://www.okamura.co.jp/magazine/wave/archive/1602miyazakiB.html>

ミヤザキケンスケ 世界の紛争地の壁に、<スーパーハッピーな絵>を描き続ける (ライフネットジャーナルオンライン)

<https://media.lifenet-seimei.co.jp/2018/09/07/13210/>

一緒にご飯を食べ、同じ目標を向けば、人は理解し合えるかもしれない: ミヤザキケンスケさん (ライフネットジャーナルオンライン)

<https://media.lifenet-seimei.co.jp/2018/09/11/13283/>

ミヤザキケンスケ-NEXTYLE

<https://nextyle.tv/nexstar/miyazaki/>